

Jリーガーのセカンドキャリアサポート

桜美林大学澤井ゼミ B

○柴田京太 坂下実穂 佐藤つかさ
久嶋瑠衣 森まりも

1. はじめに

「プロサッカー選手」というと高給のイメージがあるが、Jリーガーの平均年収は2,217万円、日本人の最高年俸は1億5000万円（サカマネ.net、2014）、平均の引退年齢が26歳である（高橋・重野、2010）。これはプロ野球選手の平均年俸3,678万円、平均引退年齢29.8歳と比較しても決して恵まれているとは言えない（ベスマネ.net、2014）。また、Jリーグでは2002年にキャリアサポートセンター（通称CSC）が設立されたが、2012年に廃止となっている。近年、スポーツ選手のセカンドキャリアについて関心が集まっているが、その調査研究はまだ十分とは言えないと思われる。特に、近年は選手の低年齢化（早期化）と引退年齢の後ろ倒しによりセカンドキャリアの問題は益々深刻化しているとも言われている。そこで、本研究ではJリーガーのキャリアの現状を明らかにするとともに、セカンドキャリアのサポート体制について検討し、施策の提案を行うことを目的とした。

2. 研究方法

2-1. Jリーガーのプロフィール

選手の年齢や最終学歴はキャリアに大きく影響する。そこで本調査では、2014シーズンのJリーガーの年齢や年齢分布、最終学歴などについてJリーグ公式ホームページ、各クラブホームページより集計しその特徴を分析した。

2-2. Jリーガーのセカンドキャリアの実態

① J1上位クラブの職員（調査日程；2014.10.02）

Jクラブからみた選手のセカンドキャリアの実態、課題、対応などについて聞いた。

② Jリーグ選手会職員（調査日程；2014.10.07）

選手会の活動について、選手会からみたセカンドキャリア 等

2-3. デュアルキャリアに関する調査

アスリートのセカンドキャリアの問題について、近年注目されている「デュアルキャリア」について、元オーストリア女子柔道代表選手であり、デュアルキャリアに関する研究を行っているライトナー・カトリン・友海子助教に、デュアルキャリアの実態、ヨーロッパと日本のアスリートのキャリアと制度についてお話を聞いた。（調査日程；2014.10.09）

3. 調査結果

3-1. Jリーガーのプロフィール

Jリーガーの平均年齢は約26歳、J1が25.8歳、J2が26.2歳、J3が25.8歳とカテゴリー間に差はみられない。しかし、それぞれの選手の年齢分布をみると（図1）、選手年齢のピークがJ1では18歳、20歳、24歳、28歳にみられるのに対し、J2では21歳、25歳、30歳にみられるなど、J1から1～2年遅れて生じている。これは、J1を戦力外となった選手がJ2に流れていることを示すものかもしれない。また、J3では23歳～27歳までの選手の層が極端に厚くなっている。これはセミプロ選手の多いJ3ならではの特徴と考えられる。

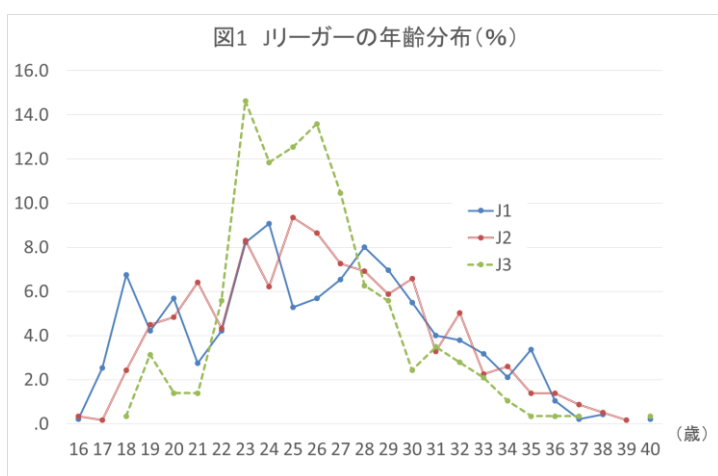
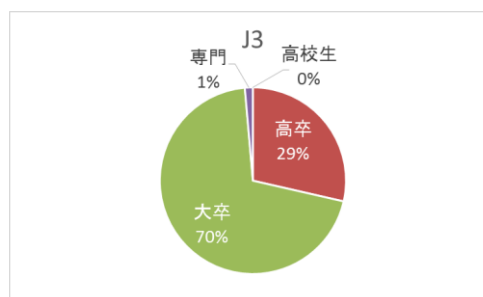
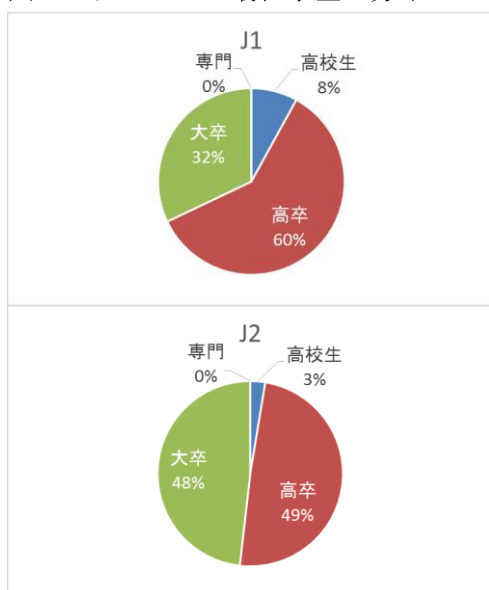


図2 Jリーガーの最終学歴の分布



一方、最終学歴を観ると、J1では高卒60%、大卒32%、J2ではそれぞれ49%、48%、J3では29%、70%と、カテゴリーごとに明確な差がみられた。こうしてみると、カテゴリーごと、セカンドキャリアサポートのあり方も、やり方が変わってくるものと思われる。

3-2. Jリーガーのセカンドキャリアの実態

①セカンドキャリアのセカンドキャリア

Jクラブスタッフによると、J1上位を争うこのクラブでは「引退」する選手はほとんどおらず、戦力外の選手はJ2やJ3、JFL、地域リーグ、大学などカテゴリーを下げて移籍していくという。また、クラブのサッカースクールコーチになる選手もいるがプロ契約で待遇も良いわけではなく、一生できる仕事とは言えないという。すなわち、Jリーガーのセカンドキャリアについて、J1よりも下のカテゴリーでより問題となること、またセカンドキャリアでサッカーの仕事に残ると、さらにそのセカンドキャリアについて考えなければならないという問題が生じる。

②選手の意識

現役選手にセカンドキャリアのことを考えさせる難しさについては高橋・重野（2010）も述べているとおり、大きな課題である。インタビューからは、競技にのみ専心し、キャリアに対する視野の狭さ、競技以外のさまざまなことへの無関心な競技者の多いことが問題と思われた。

3-3. わが国におけるデュアルキャリアの課題

デュアルキャリアとは、「エリート競技者としてのアスリートライフ(パフォーマンスやトレーニング)に必要な環境を確保しながら、現役引退後の雇用に必要な教育や職業訓練を受け、将来に備える」という概念である。欧州では競技と勉強、競技と仕事がまったく別々であり、特にトップレベルの競技者が勉強や仕事と両立することが難しかったため、両立をより容易にする条件を整えようとし、検討されるようになった。一方、日本は学校スポーツであり、勉強とスポーツをする場所が一緒であることから、すでにデュアルキャリアの環境が整っていると言える。しかし環境的にはデュアルキャリアの条件が整っているものの、述べたように選手の多くは競技以外に対する関心が乏しく、在学中も専ら競技にのみ専心していてせつかくのデュアルキャリア環境が生かされていないという。

4. 分析

以上のような調査結果から、次のような課題を抽出した。

- 下位カテゴリーのクラブほどセカンドキャリアが問題になる
- 上位カテゴリーでは高卒の、下位カテゴリーほど大卒選手が多く、大卒Jリーガーのキャリアサポートが課題となる
- セカンドキャリアのセカンドキャリア（サードキャリア）が問題（J1→J2,J3、JFLへと下方移籍しつつ、競技期間延長による選手のキャリアの問題）
- 競技者が現役中のセカンドキャリアサポートの限界
- 日本の競技環境（学校スポーツ・企業スポーツ）はすでにデュアルキャリア環境を備えているが選手の意識がデュアルキャリアに対応できていない。

5. 政策提言および政策課題

そこで本研究では、プロになる前の時期に着目し、次のような政策を検討した。

1. 大学におけるアスリート・キャリア・アドバイザー(ACA)の設置

特に大学において、競技者がプロ選手になる前にセカンドキャリアへの準備をさせることを優先した政策を考えた。ライトナー助教によると、ドイツでは競技者である選手と大学の教員との調整を図るパートナー大学という制度があるという。日本では現在、競技と学業の両立について個々の学生が教員と交渉しているが、これを専門に行い、かつキャリアへの関心を高めるアスリート・キャリア・アドバイザー(ACA)を配置する。学業・競技両立へのサポートや学生選手のメンタルケアをすることで選手が安心して競技に臨む環境作りを行い、学生と教員の間に入り中立的な立場から学生に単位取得、競技と学業の両立におけるアドバイス、教員に学生の競技に対する姿勢の理解を求める(大会などで講義に出席できない場合の措置について)ことを役割とする。文武両道によるイメージアップ、イメージアップによる入学希望者数の増加、部活動の強化というメリットから、費用は大学で負担し、東京オリンピックを控えていることから強化費から予算を充てることも検討できるかもしれない。また人材としては学校カリキュラムの理解が必要であり、選手(学生)が話しやすく、信頼関係が築きやすい元アスリートが良いと思われる。

2. 続・夢先生

高校生やユース選手を対象に、サッカー以外のことに興味、関心を向けるきっかけ作りを目的とし、特に強豪高校(大会実績のある学校、競技における名門校)などでサッカー選手という夢の“その後”について考えさせ、「スポーツ以外の夢」も持つように促し、サッカー選手になって終わりではなく、その後も就職し生活していくという認識を持たせる授業を行う。現在日本サッカー協会が行っている「夢先生」にならい「次の夢」について考える。原資は日本サッカー協会や、JリーグがCSCに充てていた予算を充てることが考えられる。集合形式の事業であるので、CSCよりも効率的と思われる。人材としては選手の気持ちも理解しやすいため元サッカー選手で現在サッカー関連以外の職業に就いている人に依頼する。ユース選手については、クラブが練習後のクラブハウスやOBを活用するなどして低予算で定期的に行うことが考えられる。

6. 参考文献

- アメリカ野球愛好会編、「ダッグアウト」第9巻第1号、p4
- ベスマネ.net (プロ野球選手 年俸ランキング)
- Jリーグ公式サイト
- プロ野球選手会
- サカマネ.net (2014年Jリーグサッカー選手 年俸ランキング)
- 高橋潔・重野弘三郎「Jリーグにおけるキャリアの転機——キャリアサポートの理論と実際」日本労働研究雑誌、No.1、pp119-129、2010、pp16-26